

### 3.1 中心力場の運動

ある点 (たとえば原点) からの距離のみによって決まる力を中心力と呼ぶ. 中心力  $F$  は位置ベクトル  $r$  を用いて一般に

$$F = f(r) \frac{\mathbf{r}}{r}$$

と表される. ここで  $f(r)$  は  $r$  のみによって決まる関数である. このとき中心力の中で運動する物体について, 面積速度

$$\frac{1}{2} \mathbf{r} \times \frac{d\mathbf{r}}{dt}$$

は時間によらず一定であることを示せ.

### 3.2 質点系の運動エネルギーと角運動量

$n$  個の質点からなる系を考える. 各質点の質量を  $m_i (i = 1 \cdots n)$ , 位置ベクトルを  $\mathbf{r}_i (i = 1 \cdots n)$  とする.

(1) 系の全運動エネルギー  $T_{all}$  は

$$T_{all} = \frac{1}{2} m \bar{v}^2 + \frac{1}{2} \sum_{i=1}^n m_i (\mathbf{v}_i - \bar{\mathbf{v}})^2$$

と表されることを示せ. ここで  $m$  は系の全質量,  $\bar{\mathbf{r}}$  は重心の位置ベクトル,  $\bar{\mathbf{v}}$  は重心の速度である.

(2)  $i$  番目の質点の運動方程式は

$$m_i \frac{d^2 \mathbf{r}_i}{dt^2} = \mathbf{f}_{i,ex} + \sum_{j=1}^n \mathbf{f}_{ij}$$

とする. ここで  $\mathbf{f}_{i,ex}$  は  $i$  番目の質点に働く外力,  $\mathbf{f}_{ij}$  は  $j$  番目の質点が  $i$  番目の質点に及ぼす内力で  $\mathbf{f}_{ii} = 0$  である. このとき系の全角運動量  $L_{all}$  の時間変化は

$$\frac{dL_{all}}{dt} = \sum_{i=1}^n \mathbf{N}_{i,ex}, \quad \mathbf{N}_{i,ex} = \mathbf{r}_i \times \mathbf{f}_{i,ex}$$

となることを示せ.

### 3.3 回転系の運動方程式

静止している直交座標系に対し, 第 3 軸を軸として一定の角速度  $\omega$  で回転する座標系の運動方程式を以下の手順で求めよ.

- (1) 静止している直交座標系の基底ベクトルを  $e_1, e_2, e_3$ , 回転する座標系の基底ベクトルを  $e'_1, e'_2, e'_3$  とする. このとき

$$\frac{de'_1}{dt} = \omega \times e'_1, \quad \frac{de'_2}{dt} = \omega \times e'_2, \quad \frac{de'_3}{dt} = 0,$$

であることを示せ. ただし  $\omega = \omega e'_3$  である.

- (2) 位置ベクトル  $r = xe_1 + ye_2 + ze_3 = x'e_1 + y'e_2 + z'e_3 = r'$  について以下の関係が成り立つことを示せ.

$$\begin{aligned} \frac{dr'}{dt} &= \frac{d'r}{dt} + \omega \times r', \\ \frac{d^2r'}{dt^2} &= \frac{d^2r}{dt^2} + 2\omega \times \frac{d'r}{dt} + \omega \times (\omega \times r'). \end{aligned}$$

ここで

$$\begin{aligned} \frac{d'r}{dt} &= \frac{d'x'}{dt} e'_1 + \frac{d'y'}{dt} e'_2 + \frac{d'z'}{dt} e'_3, \\ \frac{d^2r}{dt^2} &= \frac{d^2x'}{dt^2} e'_1 + \frac{d^2y'}{dt^2} e'_2 + \frac{d^2z'}{dt^2} e'_3 \end{aligned}$$

と表される回転系の時間微分である.

- (3) 静止系での運動方程式

$$m \frac{d^2r}{dt^2} = \mathbf{F}$$

を回転系の表現に変換せよ.

### 3.4 スカラーの勾配

座標  $x, y, z$  の関数  $f = f(x, y, z)$  が与えられた場合, 点  $(x, y, z)$  における  $f$  の勾配 (gradient) は以下のように定義される.

$$\text{grad } f \equiv \frac{\partial f}{\partial x} \mathbf{e}_x + \frac{\partial f}{\partial y} \mathbf{e}_y + \frac{\partial f}{\partial z} \mathbf{e}_z. \quad (3.1)$$

ここで  $\mathbf{e}_i$  は  $i$  方向の単位ベクトルである. grad はグラジエント, もしくはグラッドと発音する. (3.1) はハミルトンの演算子

$$\nabla \equiv \mathbf{e}_x \frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{e}_y \frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{e}_z \frac{\partial}{\partial z}$$

を用いると

$$\text{grad } f = \nabla f$$

と表される.

- (1) 固定点  $P$  から一定の微小距離  $dr$  だけ離れた点  $Q$  がある. 点  $P$  から  $Q$  へ移動した際の関数  $f$  の変化が最大となるのは, ベクトル  $PQ$  が点  $P$  における  $\nabla f$  に平行な場合であることを示せ (ヒント: ベクトル  $PQ$  を  $dr = \mathbf{e}_x dx + \mathbf{e}_y dy + \mathbf{e}_z dz$  としてみよ).
- (2)  $\nabla f$  は  $f = \text{一定}$  の面 (これを等位面と呼ぶ) に垂直であることを示せ.
- (3)  $g$  を  $f$  とは異なるスカラー関数とする場合, 以下の式が成り立つことを示せ. ただし  $\alpha, \beta$  はスカラーとする.

$$(i) \nabla(\alpha f + \beta g) = \alpha \nabla f + \beta \nabla g$$

$$(ii) \nabla(fg) = g \nabla f + f \nabla g$$

$$(iii) \nabla \left( \frac{g}{f} \right) = \frac{f \nabla g - g \nabla f}{f^2}$$

$$(iv) \nabla f(g) = \frac{\partial f}{\partial g} \nabla g$$

### 3.5 ベクトルの発散

各成分が座標の関数となっているベクトル

$$\mathbf{A} = a_x(x, y, z)\mathbf{e}_x + a_y(x, y, z)\mathbf{e}_y + a_z(x, y, z)\mathbf{e}_z$$

を考える (このとき  $\mathbf{A}$  をベクトル場と呼ぶ).  $\mathbf{A}$  の発散 (divergence, ダイバージェンス) は以下のように定義される.

$$\operatorname{div} \mathbf{A} \equiv \frac{\partial a_x}{\partial x} + \frac{\partial a_y}{\partial y} + \frac{\partial a_z}{\partial z}. \quad (3.2)$$

(1)  $\varphi = \varphi(x, y, z)$  をスカラー関数とすると,

$$\operatorname{div} \cdot (\varphi \mathbf{A}) = (\operatorname{grad} \varphi) \cdot \mathbf{A} + \varphi \operatorname{div} \cdot \mathbf{A}$$

となることを示せ.

(2) スカラー関数  $\varphi$  に対し,

$$\operatorname{div} (\operatorname{grad} \varphi) = \frac{\partial^2 \varphi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial z^2}$$

となることを示せ.

$\operatorname{div} (\operatorname{grad} \varphi)$  は  $\nabla \cdot (\nabla \varphi)$ ,  $\nabla^2 \varphi$  等とも表す. とくに  $\nabla^2$  を記号  $\Delta$  で表し, これをラプラス演算子と呼ぶ.

### 3.6 ベクトルの回転

ベクトル場  $A$  に対し, その回転 (rotation, ローテーション, ロート) は以下のように定義される.

$$\operatorname{rot} A \equiv \left( \frac{\partial a_z}{\partial y} - \frac{\partial a_y}{\partial z} \right) \mathbf{e}_x + \left( \frac{\partial a_x}{\partial z} - \frac{\partial a_z}{\partial x} \right) \mathbf{e}_y + \left( \frac{\partial a_y}{\partial x} - \frac{\partial a_x}{\partial y} \right) \mathbf{e}_z. \quad (3.3)$$

行列式の形で書けば,

$$\operatorname{rot} A = \begin{vmatrix} \mathbf{e}_x & \mathbf{e}_y & \mathbf{e}_z \\ \frac{\partial}{\partial x} & \frac{\partial}{\partial y} & \frac{\partial}{\partial z} \\ a_x & a_y & a_z \end{vmatrix}$$

と表される.

- (1)  $\operatorname{rot} A$  の第  $i$  成分をエディントンのイプシロン  $\varepsilon_{ijk}$  を用いて表せ.
- (2) スカラー関数  $\varphi$  に対し  $\operatorname{rot} (\operatorname{grad} \varphi) = 0$  となることを示せ.
- (3)  $\operatorname{div} (\operatorname{rot} A) = 0$  となることを示せ.
- (4)  $\operatorname{rot} (\varphi A) = (\operatorname{grad} \varphi) \times A + \varphi \operatorname{rot} A$  となることを示せ.